

ひとりしずかしよう

一人静抄

馬場 駿

野鳥がこぞつて鳴きだしたのでそろそろ霽はれあがるのだろう。少し肌寒いのだがいつも通りに表に出た。ふわふわと漂う微細な白いものが樹々の若葉の隙間を選んで地表に降りてくる。やや距離が離れた林の方は水墨画のような風情だ。日本画家だった亡き父が終の棲家として選んだ気持ちだが、古希を超えてからより深く理解できるようなになった。家の敷地を出たとたん苔生した花崗岩に出会う。もつとも岩場というほどではなく日本庭園の庭石といった感じで散らばっている。地面から木々の根、幹、枝と目を移していくときに雑草や篠竹といった邪魔物が無いのはこの辺りだけだ。喬木たちの枝の張り具合は誰が決めるのかと首を傾げるくらい互いに調和を保っている。それでもなお、樹々が自己主張をしてくる時季がある。新緑が陽を受けて濃淡を競ういまこのときと、それぞれに葉が少しずつ時をずらせて赤や黄色に染まってく秋のころだ。そうそう敷地と言っても

特に目に見える境界標があるわけではなく、父がブロック塀や生垣で自然を壊すような無粋な真似をするはずもない。正面玄関の「垂水悟」という本名の表札が唯一の例外だが、これは父母亡きあと画家の卵だった双子の姉が田舎暮らしを嫌って首都圏のどこかに去ったとき、父母の生前からの家政婦の勧めで取り付けたものだった。表札は「男も居るぞ」という意味で、いわば番犬代わりだった。

百メートルも歩いたろうか、文香は大きく深呼吸をしてから戻り始めた。猪や熊といった獣も出る里山なので冒険は避けていた。

家のごく近くに背丈の低い叢くさむらがある。さつきは気がつかなかったが、種類を問わず草の葉の多くが何か細かな光るものを載せている。しゃがんでその珠の一つ一つを観察してみると水玉だった。普段見慣れている大きさではない。きつと夜来の雨は霧状だったのだ。もしいまここに日光が差し込んできたとしたらそれらは一斉に輝く宝石になる。そう思うと心が弾んだ。

「そういうと、可笑しいんだから文香は」

姉の麗花の声が聞こえた。後ろを振り返ってみたが、

誰も居なかった。いるわけがない。

そうだ、もう四十年も前になる。

「どんな虫が枯葉の布団から顔を出すか楽しみなの」

もう周りは冬木立になっていた。茶褐色や灰褐色の幹と枝が交錯して、晩秋の澄み切った青空を細かく分割している。相変わらず彩り鮮やかなのは落葉たらけの地べた、未だ派手な葉っぱが小さく波打つように動いている。

「そういうバカみたいところ、とつても好き」

「ありがとう」

「お礼言うか、ここでこの子は」と麗花も腰を下ろした。

「アンデパンダン、もう始まつてるの？」

「うん、一緒に見て欲しいんだけど、当日は文香、東京の大病院だつてね」

地方の病院では埒が明かず父が生前主治医として選んでくれた心臓疾患の専門医の許へ行くことになっていた。今回の付き添いは家政婦の高村千鶴だ。

「一緒に行けたら二人で東京つて何年ぶりかなあ」

「ママが生きてた時だから六年ぶりだね」

少しの間沈黙が流れた。まだ虫は顔を出さないでいる。

「二人きりになっちゃったもんね」と麗花が肩に触れた。

「雑木林の下で、二人静の花みたい」

「あはっ、あの目立たない花ね、やだあ」

辺りに自生している花だ。二人してクスクスと笑う。

「たしかに一人静のほうが綺麗そう」

こちらは母の静香が手を廻して探していた。開花時季は春、四月から五月で二人静より少し早い。随筆家である母にどんな花かと訊いたことがある。「まゆはぎんぎさ」という別名があり、白い小さな花をつけるが花びらというものが無い。その代わり蕊(しべ)が白い花のようで美しい。落葉をかき分けて真っ直ぐに茎を伸ばし、その先端部分で葉っぱにくるまって真つ直ぐに茎を覗かせているときが一番可愛い。何よりも楚々としているのがいいという。実際に一人静に会う日が楽しみだった。

「きれいでも名前が寂しいよ、ひとりほちよつとね」

「うん」と言つて二度瞬きをした。「だから死なないですね」と麗花が続けて言いそうな気がして。

そのとき微かな音を立てて枯葉から出てきたのはカメムシに似た黒くて小さな昆虫だった。

「こんな虫でもオスメスあるのかな」

麗花が落葉一枚を丸めて虫の尻をチョンと突いた。

「ねえ、麗花あ、セックスってどんな感じなの」

突然自分の口を突いて出た言葉に少し慌てた。死ぬ前に一度は抱かれてみたい。それは今度の病院行きの動機でもあった。父箕山(きぎさん)は何度も言った。命と引き換えになる恐れがある。だから結婚も諦めなさい、周囲にも大きな負担になってしまつと。確かめたかった、開業医での初診のときも、大学病院での精密検査でも、医師から詳しい説明を受けたのは患者本人ではなく何故か父だったのだ。それでも父を信じ三十二歳になるいまままで忠告を守っていたのは、彼の身に失神やめまいが何度も起こり、さらに文香と同じ類の病だという心疾患で突然に逝ってしまったからだ。

「そうか…そつだよね…」

男性遍歴が自慢の麗花もさすがに答えられず、文香の肩を抱くと、ゆつくりと揺すつた。そのときの表情は子どもどものときのように優しさに満ちたものだった。

夜麗花は文香の部屋で、自分独りで性的な快感に浸る術を教えてくれた。実際にはなく言葉と仕種だけだったが、文香にとつてはいい年をしてかなり刺激的だった。

ただ、部屋を出て行くときに麗花は振り向いてボソリと言つた、「でもさあ、これ、文香の場合快感と命のやり取りになるかもね」と。

もしかしたら姉妹の関係が一番良かったのが、あのときかもしれない。ゆつくり立ち上がると、踵を返して玄関に向かった。今日のお昼には千鶴の娘が来る。週に一度、画廊のようになつてゐる父の部屋と図書室と見紛うばかりの母の部屋を掃除するためだ。娘といつても今はもう五十八、料理上手は母親譲りだ。だからといって、いつも彼女持参のご馳走に預かつてはさすがに気が引ける。午餐とまではいかないが、何か気の利いたものを作つておこうと思つた。

卒寿を超え体調を崩して一年余りの千鶴は、若い日に文香と交わした管理契約を守り、長女の由紀に履行義務を継いでいた。文香に万一のことがあったとき以後も続く性質のものだったからだ。それでも文香の心臓がICD(植え込み式除細動器)など最新の医療機器のお陰で大過なく動いているいまは、話し相手としての交流が主になつてゐる。

「わたし、噂だけで麗花さんを良く知らないんですけど、いまはどこにいるんです?」

結局彼女の創った特製カレーが昼ご飯になったのだが、話の方は料理からいつの間にか姉の消息につながっていた。何度か由紀に聞かされている姉の評価はすこぶる悪かった。放蕩三昧、浪費癖、おそらくこの山荘を含む地域の噂が情報源なのだろうが、怖いことになり正確なものだった。

「それが分らないのよ、十年前に一度帰って来たけど一週間ぐらい居てまた行ってしまっただけ、それきり。遠いところとは言ってたけど」

嘘だがそれしか言いようが無かった。あのとき「十万貸して」と掌を差し出した麗花。涙が出た。父と母の相続を経て互いに二千万に近い預貯金ができたはずなのに、驚くほど少額の無心だったからだ。自分の稼いだ金で生きることを基本にするかどうかで二人の人生は大きく別れたと思う。姉は幼い時絵心を見出され父から手ほどきを受けて画家の卵にまでなつたのに、遺産の魔力に負けて、それを自ら叩き潰してしまつた。

「こんなにいいお家があるのにねえ、ここに住み込んで

た人と結婚もしたんでしょ、何だか不思議な双子さんね、あまりにも文香さんと違う」

「由紀さんもいろいろ知ってるのね」と小さく笑つた。詮索されるのは嫌だった。とくに父の絵と母の文筆に関して忠実な補助担当だった足立孝継には触れて欲しくなかつた。

「すみません、余計なことを聞いて。自分の立ち位置をわきまえて務めなさいって母に言われてたのに」

「ううん、いいのよ、お二人には死後のあらゆる管理をお願いしているんだから並みの家族以上かも」

それにしても本当に優れた家政婦だった千鶴…

「文香ちゃん、ほんとに信じているのね、彼のこと」

「ハンドル操作が要らない直線道路で千鶴が言った。」

「ふつうにいう信頼とは少し違うかな」

「そうなの?」

「自分のことを想ってくれている誰かを絶対的に信じていないと、自分がフツと消えてしまふと怖いよ、それだけ」

「ああ、それでかあ、彼が麗花ちゃんと結婚してしまつ

ても信じてた理由は」

「ふふつ、すぐに離婚してもね」と片頬で笑った。

「それも不思議だったなあ、ふつう男の誠実さを疑うもの。わたしみたいな女にはぜったい無理」

駐車場に着くと足立はすぐに見つけることが出来た。比較的小さいサーブスエリアだからと、トイレの前のベンチに座っていることが約束だったのだ。

足立は文香に手を振ったが、運転手が家政婦の千鶴だと分かったらしく丁寧なお辞儀に変えた。

文香は二百万の札束の入った封筒と自分の著書を重ねて手にすると「すぐ戻るね」と言い、彼へのシグナルのつもりでハンドバックは持たず車を飛び出して足立の許に駆け寄った。

「今日中に損害を賠償するって会社に確約しちゃってさ」と足立は頭を下げた。

「じゃこれ、わたしの書いた古い本と新刊本を入れた封筒ね」と差し出した。文香のエッセイ集『自分の命を手鞠にしつつ』が銀行の封筒を隠している。

横を数人の男女が通ってトイレに入った。
「ほんとに来てくれたんだ、不思議な人だ」

「両親がお世話になりましたから、と云うことで」

もう、それ以上でも以下でもない胸を張った。

「急いで、でも運転気を付けて。じゃ、わたし行くから」と車内の千鶴に済んだという意味で手を挙げた。

「文香、手紙書くから」

「うん、待ってる、いつもどおりに。あ、その本の方は後で捨ててね」この意味が足立に解るかどうか。

誰が待つものかと、停車した車の中にするりと入った。前を見据え、もう、足立の方は見なかった。

「いいの？」

千鶴はどうやら、別れを惜しむのではと氣遣ってくれていたらしい。

「行きましょう、もう済んだし」

ビジネスライクを貫いたのに、涙が勝手に出てきた。「自分につく嘘って辛いよね」と車が動き出すと同時に千鶴が声を詰まらせて言った。

「知ってました？ 前から」

「ええまあ、わたしなりに」

「お母さんになってくれませんか、わたしの」

いかにも唐突な申し出をした。

「わたしが二十歳で産んだ子ども？」

「はい、あつても不思議じゃない歳の差よね」

「でも母親だとお金受け取れないもの、困るわ」
話を軽くしようとしている配慮が嬉しかった。

「仕送りする子どもだっているよ」

心して明るい声で返した。

「ほんとだ、じゃあ今からということだ」

二人して一瞬だったが目を合わせ、微笑んだ。

麗花や足立の話題は立ち消えになったが、午後は二人の顔が時折現れては消え、少しナーバスになった。

夕方、由紀には自分の新刊本『二人静が消えた日』をもたせた。郷土の作家だからか、彼女は山荘任務に就く前から文香の本は読みこんでいたらしい。県の大学で文学部を卒業して子持ちになるまで役場に勤めていたという。話が合うのも自然なのかもしれない。

現在も使っている個室は竣工当初から文香が成人するまでの間、母親の書齋だったところだ。しかしそれは目的がそうだけというだけで実際は寝起きもしていた。暖炉があり、誕生日など二家で楽しむときは必ず火が入っ

た。大きな窓はあるが通常の高さでの窓は無い。言ってみれば、趣はあるが解放感に欠けた。その代わり、部屋の出入り口から長さ五メートルはある中廊下の両面には、ブラインドこそ備えているものの強化ガラスで嵌め殺しの大きな窓がある。文香はここを通るたびに外を見る。北側にはヒメシヤラ、南側にはリョウブが立っているが、これは父が別荘に籠ると決めた際、母の頼みを聞いて東京の本宅から移植したものだ。そうだった、今日のように、こうして外を見ていた時のことだ。

「珍しいですね、自生ですか」と、文芸作品や画集を發行している相聞社から指示され、初めて垂水家を訪れた足立が、図々しいくらい近くに寄って来た。

彼の上腕部分が左の肩に触れた。

「もう少し離れてくださる」と柔らかくたしなめた。

「すみません、つい」足立は少し下がった。

「つい、ですか？」故意に感じたのだが。

「いえ、あまりにもお美しいので」

お世辞ではなかったと大分経ってから本人が言った。

美大でかなり数の女学生や裸婦のデッサンの際に若いモデルを目にしているが、文香ほど透き通った美形は初めてだ、加えてたおやかさがたまらない魅力だったと。いずれにせよ文香が二十一歳のときの話だ。

気色悪さを感じながらも、確か笑みを湛えて無作法を許した記憶がある。

この後すぐだった。足立は、静香から勧められて処女出版とした『自分の命を手鞠にしつつ』を手に入れたと言ってきた。

『女が着飾るのは異性ではなく同性を意識してのこと。女の肌の露出度が高いのは男の眼が自分の心の中を覗き見るのを防ぐため。男を知らない私だからそう感じるのかもしれないと、ここは告白しておくけれど』

本当に読んだという証拠にとでも思ったのか、彼は本文の一部を暗誦してみせた。

不思議だった。母に草稿をみてもらったとき、辛辣なコメントをもらったのがこの部分だったのだ。母は真剣な顔つきで言った。

「格好のいい文章を書こうなんて思わないでもいいのよ、特にエッセイではね。自分の本音を、自分の言葉で

自然に著わせれば十分なの。ただ、読む人に伝わりやすくする工夫はいるわね。独断的で背伸びしたこのところね、後ろに男を知らない私だから云々が添えられているので、まあいいわよ。男を知らないという言葉には少なくとも二通りの解釈ができるわ。男というものを理解していないが一つ。もう一つはバージン。読んだ人が、なるほど納得とか、それならまあいいだろうと許してくれたり、じゃあ俺が女にしてやるよと妄想でニヤリとしたり、いろいろ反応を起こせると思うから」

かなり落ち込んだ記憶がある。そこまで考えての付加ではなかったのだ。

ドアを開けて部屋の中に入り、背中中で閉めた後、しばらくその場に立って動けずにいた。

洒落た仕様の耐火煉瓦で囲まれた暖炉が冷たい目で自分を見ている。そう感じた。

「春だけど火を入れようか」

寒いのは心かもしれないが、外に在る薪置き場に向かった。

あれは晩秋だった。麗花の配慮なのだろう、千鶴に車で送られて外出から戻ると暖炉に火が入っていた。

足立からの、局留め郵便ではなく山荘直通で届いた四角い封書：それが机の上に置いてある。その横には五センチほどの厚さで足立から来た過去の手紙が積んであった。机の抽斗に仕舞っておいだものだ。ただその全てではない、ほんの一部だ。

「麗花がこれを読んだわけ…」と抽斗を開ける。お互いのプライバシーは尊重する約束だったのにと、唇を噛んだ。読まれていいわけがない。

とりあえず四角い封筒を抜いた。知らない女との結婚式の場所は東京の一流ホテル、期日は半月後の吉日、媒酌人は勤務先相聞社の専務夫妻だった。しばらく見つけていたら自分でも不思議だったが、体が揺れるほどに大笑いをしだした。

「お帰り」と後ろで声がしたので笑うのを止めた。

「笑いたい気持ち、分かるよ」

「麗花これ、みんな読んだの？」と机上と開いた抽斗の中の手紙を交互に指差した。

「まさか、でも秘蔵の手紙の中から二年分抜き取ってそ

こに積んだ。二年の意味、分かるよね」

何か言おうとしたのを麗花の右掌が止めた。

「何にも云わなくていいよ。文香のことだから愛だの恋だの燃えるような文通はしていかないでしょうよ、まあ、中学生の交換日記程度だ、きつと。でもね、悪いけど机に出したのだけは文香自身が暖炉の火で燃やして。投げ込んで燃えるのはわたしの嫉妬よ、足立は文香を想いながら妻のわたしを抱いてたことになるのよ、一年間も。双子で姿かたちがほとんど一緒だから！それが哀れだと思ったらいま燃やして」瞋恚の眼だった。

「わかった」と文香は、机上の束を掴むと、何のためらいもなく暖炉へと運んだ。投げ込んだ後で招待状もまた炎の中に放り込んだ。

「え？ いいの、それで」と麗花は目を瞬いた。

「うん、麗花と一緒に想像していた以上のことですげなから」

「だって手紙にあったじゃない、二百万出してやったんでしょ、好きだからじゃないの」

「やっぱり読んでた」と肩をすぼめて、「退職金よ、一家全員のために何年もの間仕えてくれたのに、うっかり何

一つ報いてなかったから。だから彼から催促されたと解
釈したの。それだけ」と結んだ。

「局留めにして郵便局に手紙を取りに行つてたのは知
つてたよ、最初の頃はね。家族に内緒にしてまでの文通
には妬けたわ。でもまさかわたしが取つちやつたあとま
でとはね…あいつも、半端じゃないね」

「わたしでもでしょ、麗花」とまた唇を噛んだ。今度は或
る種恥じ入つてのことだった。

「うううん、あんたはこういうの、ねんねだから」

麗花は微笑しながら首をすくめた。

「あのことなら死ぬまでずっとだよ、大人になれない」
男と女になれないのだ。

「文香、なぜわたしが足立と一緒になり、なぜ別れたか
知つてるの？もし知つててだったら、ねんねどころか」

「なに？」と目を見開いた。

「いや、べつに…それはないな」

麗花は不自然な自問自答をした後で出て行つた。

暖炉の傍に抽斗の中身を積み上げたところ、足立の手
紙が赤い炎に怯えて揺れ出した。そんなふうに見えた。
そうなら嬉しいと思つた。

もし封書の積み方が日付でみて順不同のバラバラだ
つたとしても、束の中から即座に取り出せる一通の手紙。
それは恥ずかしくなるような激しいラブレターだった。
足立が来て一年ほど経つた頃に手渡しでもらつたもの
で、角に淡い赤で目印が付けてあるのだ。文香はそれだ
けを机に戻すと、残りの全てを炎の中に放り込んだ、読
み直しもせず、日付も確かめず、文字すら見ずに。一瞬
酸素を奪われて火が鎮まり、手前の灰とともに白煙が舞
い上がつて封筒の群れそのものが見えなくなつた。それ
も束の間のこと、音を立てて両端から炎が弾けると見る
見るうちに大きく燃え上がった。

炎の輻射で熱くなつた頬に一筋、涙が流れた。いま目
の前で燃えているものは自分にとって何だつたのだろ
うと、そんなことを思つた。

文香にはもう一通、宝にしている手紙があつた。書棚
の中の医学書にいまも挟み込んである。二十一歳で受け
た精密検査の中身からみれば数段進歩した医療機器の
時代に入った頃だった。離婚した麗花もその頃はまだ山
荘を暮しの拠点にしていた。

東京での三度目の検診の数日後 山荘のポストに文香宛で封書が届いた。

差出人の杉本幸治という名をみて首を傾げた。南都大
学病院で対応してくれた医師だが病院の住所ではなく
東京都世田谷区内からで、おそらく自分の住所地だろう、
つまり検査結果の詳報ではあるまい。家の中に入って清
掃中の千鶴に見せてみた。

「どう思う？」

「え、中身またなの。ラブレターでしょう、私信なもの」
「まさかあ、一度しかお会いしてないのに」そう口には
したものの、期待に胸は膨らんだ。

「早く読んでみて、わたしも見たいなあ」

「だめ、宝物かもしれないから」と笑顔で通せんぼをし
ている千鶴をすり抜けて中廊下へと進んだ。

「唐突ですが、やむに已まれぬ気持ちからお便りを差し上
げます。あなたが検診にいらしたあの日から、私は特別
な日々を過ごしています。さすがに仕事中は別ですが、
あなたの和かな笑顔が何をしても思い浮かぶので
す。すでに片想いの領域に入っています。そうだからこ
そなおさら悔やむのです。なぜ、もう少しきちんと手術

の必要性を説かなかったのかと。

手術の必要性は命の必要性に通じます。それを明確に
不要ですと教授に告げたあなた。その理由を私なりに考
えてみました。

あなたは自分の命をあなただけのものと思っている
のではないでしょうか。地域医療の青田先生から電話で
うかがいましたが、お母様も交通事故で、逝去とか、父
母共にすでに亡くし、夫も子どももいないとなれば、あ
なたが亡くなっても直接哀しむ人が少ないわけで、そん
なところにも、ご自身の命に対する未練の希薄さの源を
感じます。とすればいまのあなたに必要なもの、あなた
の胸の中に埋め込むべきは、あなたの心と命へ向けられ
た愛のような気がします。

不惑をとうに過ぎ離婚歴もある私に資格があるとも
思えませんが、私はあなたの胸の中の救命機器になりた
いのです。もう一度個人的にお会いしたい。会って色々
お話をうかがいたいし、こちらもお話をしたい。もしご
迷惑でなければ、東京のどこかで。

「返事を心熱くしてお待ちしています。杉本幸治」
文香は、読み終えて初めて気がついた。途中から涙が

流れていたことに。気が遠くなるほど長い間、独りをかみしめてきた自分を言い当てられたのだ。

父箕山と一緒に検診を受けた病院の中で、セックスも結婚も諦めるように言ってきたとき、その言葉に秘められた想いを探し求めたものだ。当初、女を棄てて自分の命を護れという意味だと理解したが、何かもう一つ納得できないものがあつた。自分なりに解釈を重ね、夫や子どもがいれば自分が万一の場合に彼らを巻き込むことになる、それでいいのか、そういうことだと結論できた。爾来ずっと守つて来た自分の中の戒律が崩れ始めた。杉本医師の手紙は巻き込まれてもいい、そうならないようにしたい、医師だから。そう言つてくれたことになるからだ。

文香は部屋で手紙を見つめながら何時間も、自分と自分の過去がようやく溶かされていく快感を味わつていた。

便箋を取り出しボールペンではなく、昔、母から贈つてもらつた万年筆を手にした。見上げると天窓が傾いた陽の光で橙色に染まつていた。親の七光りからの出発だつたとはいへ、一応文章で収入を得ている身としては気

の利いた返信にしたいと思つたものの、文香は一切の飾りを捨てて短い文で応えることにした。

「日時と待ち合わせ場所をおつしやつてください。末尾に携帯の番号を書いておきます。不慣れですけれどおしやれをして、きつと参ります。垂水文香」

しかしなぜか、いくら待てども返信は来なかつた。

文香は相手を責めずに自分を納得させた、いつもそうしていたように。「そういうことですね」と仮名で九つ、「苦」で気持ちちは始末できた。

千鶴は、こちらが話題にしないので手紙到達時にさわりだけで、その後は一度も触れて来なかつた。返信を投函した日についてはしゃいでしまい麗花にも事情を話し杉本の手紙も見せたが、眼を剥いて驚いていたわりには以後の反応は皆無に等しかつた。二人にはこの結末が容易に予測できていたに違いない。

由紀は当番日以外にもやつてくることかしばしばある。翌日も旬の食材を持って九時ごろ玄関に立つた。筍御飯と山菜のタラや柿の若葉の天ぷらがお昼だと笑顔を見せる。

「先生、きのうもらった本、全部読んだわ、だから昂奮して来ちゃった、とつても共感できた」

「やめてよ、先生なんて。世間じや七光り作家と笑われている身なのよ、わたし。何かの間違いで食べて来られただけ。それより山菜置いて一緒に来て」と下駄を引っ掛け「きれいなものよ、日差しが朝靄を溶かしていくの、裏手の山が見える方」と由紀の手を引いた。

手前の白いベールからゆつくりと消え、若葉を積んだ木々が次々と現れて来て、終には千メートルを超え山々の頂が見えてくる。

二人はしばらくの間、沈黙の中に居た。

「そういえば、この辺だったかなあ、もうずいぶん前だけど二人静が群生してたの。いまごろよね、時季」

由紀の唐突な言葉で無意識に顔を引き締めた。

「そうね。でも、もう出て来ないの」

「二人静はもう咲いてて、昨日も車から降りてすぐ見て来ました、多年草だったでしょ、どっちも」

「そうよ、詳しいのね。ちよつと、あの一番高い山はなんて名前なの、知ってる?」

「自生だから強いはずなんだけどなあ」と由紀は二人静

の話から離れない。

妙に避けようとするのは止そうと決めた。

「じつはね、麗花があるとき鎌を使って全部刈ってしまったの。ご丁寧に鋏で根つこの方まで掘り返してた」

「よっぽど嫌いだったんだわ、不思議」

確かにともとも好いてはいなかったが、あのとときの麗花は異常でしかない。

十年も前のこと…。

「何これ、二人静になつてる、皮肉だわ、こいつ」

そう言うときと茎から手折り靴底で踏みにしたのだ。

二人静は名前の通り地味な花穂を二本出すのがふうだが三本になることも多々ある。このとき文香は、麗花の過剰反応の意味、解釈を誤っている、怒りは姉妹の間に足立が居て三本と発想したからだと思つたのだ。

謎は夕食時に解けた。

「偉そうに説教がましいこと言わないでよ。だいいち何もかもみんなあんたのせいじゃないの」

文香は卑屈な態度で十萬の金を無心する麗花に、頼みを快く了解し小切手帳を手にして戻った後で、放浪三昧

を止めて山荘で一緒に暮らしながら絵に専念してほしいと、説いたのだった。

「わたしのせいってそれ、説明が要ると思う」と文香は色を作(な)した。

「垂水家はいつも文香中心で動いてた。本宅捨ててこんな里山に引っ越したことがその最たるものよ。パパもママも愛したのは文香、わたしじゃない」

そこまで遡るのかと少し驚いた。「ここに移ったのはパパ自身の心臓病のためだし、パパは麗花をずっとそばに置いて可愛がってた、絵だって小さい時から一生懸命教えていたじゃない。その二人に近づけないのが可哀想ってことでママはわたしに文章や物語を教えたの。これのどこが独占よ」

「違う。たしかに私も子どものときは優越感もってたわよ、あさはかにも。美術を本格的に学んでから判ったの、パパは上手に描く術を伝えてくれたただだって。画で食べていくには上手なんて何の意味もない。反対にママはもちろんのこと、口数少ないパパも、文香にはプロ意識や上手下手を超えた根本的なものごとの捉え方を教えていたのよ。二人の死後をみれば分かるじゃない、未だ

に文筆で食えているあんたと、パパの死後は誰一人見向きもしなくなつたわたしの絵」

麗花はなぜかカタルシスを求めている。そう感じた文香は全部吐き出させようと思った。

「いいよ、全部聞くから続けて」

「それも偉そうだって！ 親だけじゃなかった、あの足立もだよ、運動もろくにできない、セックスも駄目、結婚だって避けなきゃいけないっていう文香に夢中でさ、顔も形も一緒のわたしがいるじゃないかって、いつもイライラしてた。だから色仕掛けであんたから彼をさらつた。簡単だったよ、結婚まで一挙に進めて優越感に浸つた。ところが足立もバカじゃない、心根が透けて見えたらしくて他の女に手を出したんだ、会社の同僚にね。たぶん招待状のあの女だよ。知ったら優越感も吹っ飛んで惨めで耐えられなかった。で、離婚。もつと悔しくて笑えたのは結婚してた二年の間も、里山に居るあんたに愛のペンを揮つてたってこと！ 応えてたあんたも相当なものだけだね。ああ、でもこれは、文香が目の前で簡単に足立の手紙を燃やした時に解けたけどね。ちよつと快感だった。とにかく、双子だからよかつたけど、ほん

とにあの両親から生まれたのかと不安だったことだつてある。文香の心臓病が遺伝だとしたらなぜ私はそうならないの。ほんとに双子だったらなるはずだつてね、一度も不思議に思わなかった？」

麗花の口は止まらなかつたが、文香は一つのことについていてしばらくの間はほとんど聞こえなくなつた。歪んだ想いの源がすべて自分にあつたとは。人生で大事だと思われる結婚まで妹への対抗意識で決めたというのだ。本当なら震撼とせざるを得ない。

狂つたように花穂二本の二人静に敵意を燃やした麗花。彼女が見たその花穂は両親と文香だつたのだ。麗花が居ない。そう思つたのだ。

「でもすつきりしたんだ。何のことか分かる？ わたしがバツイチでこれから良縁に恵まれる可能性がないつていうのに文香が大病院の医者と結婚？ とてもじゃないけど耐えられなかつた。ラブレターを見せてキッチンでしゃべつていたときのあの笑顔。何でわたしに言うのよ、壊したくなるでしょ、ふつう！」

「ああっ」と文香は思わず声を出した。姉が何か小細工をしたんだと腑に落ちた。

「杉本って人が普通の人なら無理だけどね、大病院名と医者の名前が分かつていれば電話は可能だから」

突然文香は笑い出した、それは痙攣と見紛うほど身を震わせ、声帯ではなく胃から吐き出しているような「声」だつた。

文香は手元に残しておいた二通の封書を手に部屋から中廊下、玄関といつともどおり、ゆっくりと歩いて外に出た。

「こんな感じがいい？」と由紀が指差す先に細い粗朶（そだ）がこんもりと積まれている。

少し離れた場所には水を張つたバケツもあつた。

「由紀さん、こつちの一通だけ読んでみてくれる」

「いいんですか」由紀はアウトドライターを土の上に置くかと封筒を受け取つた。

「少しは男の人に想われたことがあつたつていいですよ、自分への証文としてとっておいたの。それにこの二通があつたから愛のエッセイが書けたようなものだし。でも、さすがにもう火葬してやりたくてね。で、あなたはそんな手紙がほんとうにあつたことの証人」

半ばはにかみながらそう言うと、土の上のライターを手にした。

「あの、なぜ暖炉ではないの？ 燃すだけなら」

「お別れはせめて外で」と柔らかにくうなずいた。

「なるほど、ですよね」

「黙読でいいわよ」と自分の口を掌で押さえた。

「目を閉じていても清楚で、それでいて艶やかな横顔が見える。あなたのやわらかな寝息を感じる。淡いけれど妖しい香りが誘うように流れてくる。僕は堪えられずに身をひるがえす。そこでいつものように目が覚め、初めてのように驚く。ベッドの上にいるはずのあなたがいないと。…」由紀は、途中で音読をやめた。

「これ、エロスを感じる」

由紀が小さくため息をついたのと、文香がもう一通の封書に火をつけたのが同時だった。

「こっちの手紙はね、悪い子に穢されてしまったので読まなかったことにしたいの。何十年もの間、大事にしてきたんだけど」

焚き付けの熱を得て粗朶はすぐに、パチパチと音を出して燃えだした。炎がスーッと立ち上がる。

「その手紙、開いたままくべてくれる」

「はい。それで、合掌します？」

「まさか、ねえ」と文香は微笑んだ。

紙になった足立が上昇気流にもってあそばれながら燃えている。熱そうに身をくねらせながら。

文香は流れ出た涙を拭いてもせずに、炎の傍でしばらくの間、立ち尽くしていた。

由紀が車で帰るのを見送った後で、文香は一人静が群れ咲いている場所に移った。そこには母親が移植をして大事にしてきた処として小さな立て看板を土に挿してある。毎年更新しているものだ。

「まゆはきぐさ眠る、踏まないで」

もちろん咲いているいまの四季は要らない。可憐な花を見て踏みつける人はいない。無粋になるので抜き去りに来たのだ。

いまも立札が要るとすれば二人静、別名きつねぐさの居た裏庭の土の方だ。

文香は目の前の一本の花穂に手を触れて穢れなき白を見詰めた後、目を閉じて合掌をした。